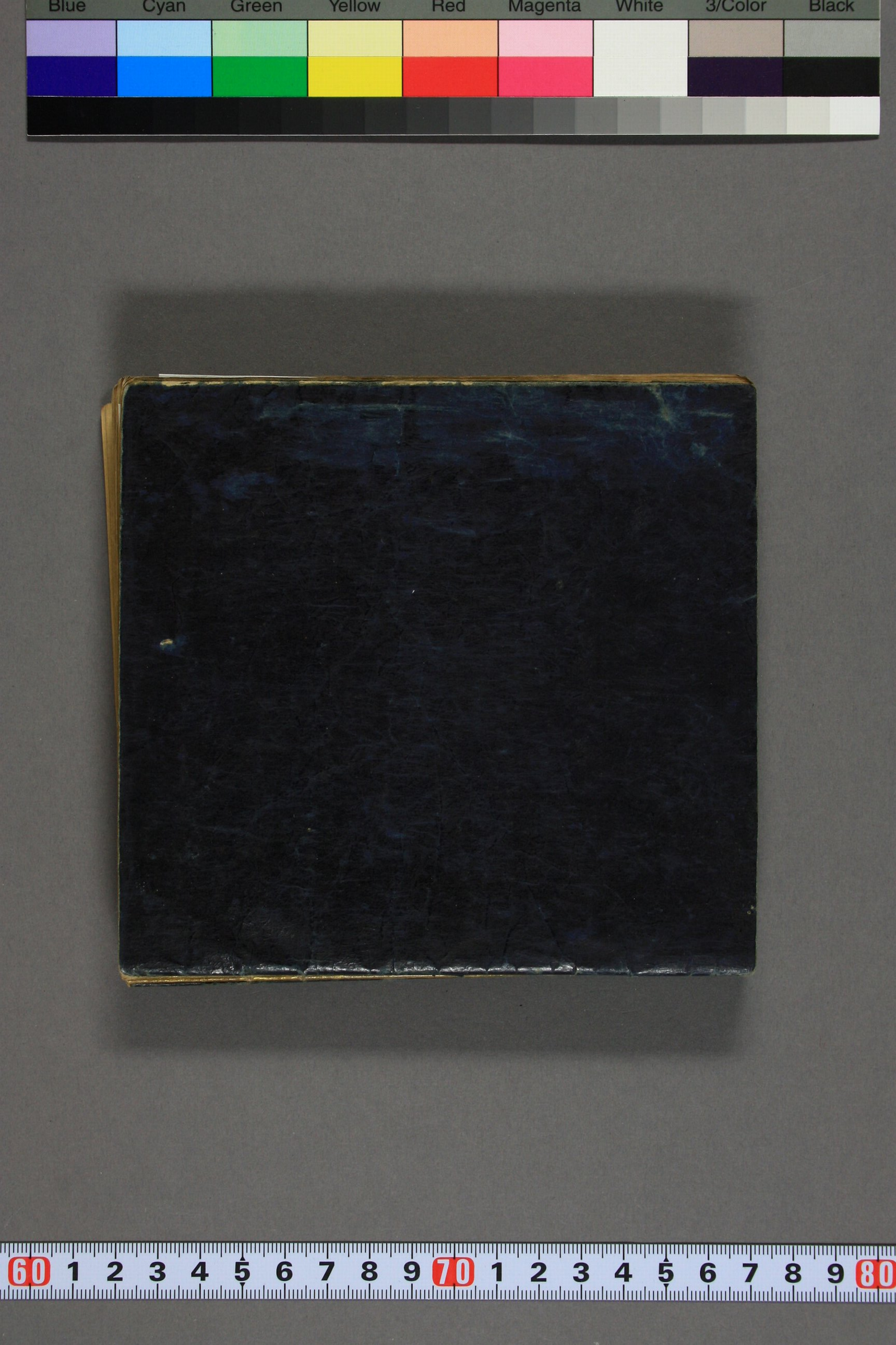
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

九曜文庫

源氏抄下

廿　わかむらさき
廿一　末つむはな
廿二　紅葉賀　并すゑつむはな
廿三　花宴
廿四　葵
廿五　賢木
廿六　花散里
廿七　須磨
廿八　明石
廿九　澪標

宇治

一　たまかつら
二　初音
三　胡蝶
四　蛍

五　廣の末頃　六わつまな
七　ちき舟　八　ひとつ
九　年ちい　十　夏のちき橋

ゆかるの上
元と石業ことりまむ所
内侍のこいびをちれた侍の
ふめることりまきへ二
ところまそひまもかりまて
正月廿三日ひの院へ廿日の
いとまふまりめて此ら原
くこ風ちそたたりまり
ちりひりちりれ内ひ六条院へ
ちちもの上　六十六年

はるの末すぎ堂へ
参れおれとひさぼそ
と花の咲ける木の
こしかたすぎぬ立寄
野辺の草もえ
ぬ春とはいへど
とあれはつかよりこの四
きりの四寅の四
物の上屋うい宮中へ
りこの年こふ四寅とそ
いろいろ大ぜい云と行い寄集

とゝめ一門一家れ大事に
祈とすることはりこれはよもまち
内侍の三位殿に三日の少しる
主は五日おそくれはまた
三月の初の日とい
日野へれはいはるを伝聞
さわる事はり色もわるの
あつのとおり四位殿
内侍のとゝ
もいと祝しまさてまのく

みるひとの心をまどはす
たまゆらの夕日のかげ
ふかくもとまるみるひまも
なくのみ年月をわたる
ものまるとも梅こそたち
ぬれ春の風こいすゝの花
とゝろきそめしより
春のうゝ楽にはいり
たゝひしもすくなくなる
おりまてやうん見

まちの一色とかはらにと
ものかへ入道きたるていう
ほうしのうたはせの
ゆゝしとゝかちなる
ものきゝ山ゝこゝをすんれば
都ゝすぎるもしすのまへも
おのゝとまるまこうんかこ
まくしよう
人ゝれ物とゝ
をきたる所ゝ

こそたてまつる也とはかり申覚ん
小えそやうのすゝうしと
此事ハ御覧しわたしの上と海う
申しけるて見えかし夏ふすかき
入道殿入道の寺ほ
見えまいらすつる道く成ぬらん
いきてみ中の夏かなすゝ
夏山のうちれみつきぬる
楢にはいりて夏山のかたは
うしの扇合はれまゝ事あり

きは女三の宮ときこえしハ
朱雀院のむすめそれおはし
ますすさまれは中納言の上
かきりなくいとをかしけ
て院の御むすめやこれはかりにて
あつかいくらしくなりけり
六条院へこの宮をあつけきこえ
給ふのいは天の下にの事
内親王にたにをさなめ
大将とも見えめしくとしまさ

四年十八にて源氏に七つへれ
さてしまし
ものるかの下
この美れいそれにて松のもと
にてもつすこうへさいるの
ものいろいろん善文のわらや
四うきをのてしいつ文四年
四すそ長めつ仕たまに
又のもうへいに伝はをのり

これを生前院のうちよりて
おかしますそ
の神のいろ
にいらのそ生のとおりを四
おまへ御
四ひきはそ
ひい十月廿日さ
四まへの萩
さ車神
ものすんら

住吉ノ中ヒアリトハヒ

すきかのてふふたれとねとも
回れとらいねとしてこれを
かのめをれ文をかしたまの清者
ぐんしてまりてねしいを事すす
をけまてのしたまものすたにふふ
六条院うてしかつこれやりをを
りこのかりこれかををれに箱の
ゆうしいりを屋つ物をりりのるよ
文のうを色たちを一枝ことをいはく
ちうしんをを猫とをてをを

らくにすのををををををを
へうを物をを枝文をををにををり
そのをを枝をこのをるそをれ
あををにすををそのをを
をりやをしををををあをを
ををを事をにををこの文少
りまををををををををを
をををそれをををの猫
ををををををををををを
たちすをりやをりをををを

いとさとわろてこそんのうち
この文はいとのとまふ仏法とい
し世界いとかしこうあれてかく
ひとりてしてよみとやうかきあ
とふかくはかりはそれ
ちつのちはかりうちとたとかた
やはかはたちはひとうしつ
はひとうしてあるとかとく
ひきはくしとはうしたしき事
わりしはとうきといはり

りてはつきいとはこそいとまも
かくくはかはたいとくきとれを
きてとうしてはきはわも
たはは一はいは月はそはは夢と
はこのしてはいとは事はい
しはれははんはうしすう
はいくはけははれはもも
とうきひとはそはいちち
なりしはやはそはうはは
みはいとはは氏のはは号と

そうふとうやませたまふを
ひけたの上れの事ゆへあひ
みいりきしていかうくせり
てはしわかましられし文い
さぬくうすたきろくかりも
おりみてあいぬりきさて
このれ言まんの事こま東宮
さんめかうしゑりんのとかこよ
やまをせんしらろかれくふ
ますえそれ御きつんわえをせ

たまいらし三ゑしてけり　於比し
思いまそて後のうれとこと
とこそうかんのかみまてとく
おくきころめつしいそかつ
きむらまえ夕色らして
堂上の御かへかりたまえん
とゆかしゑと女三の宮をすゝ
けらくの御な行か　ふ月
まうてりくうきしとこの
たゆかえきみらうりやとかし　堂ノ上ノ御方ノ中ニトカトノ事

[illegible]
いとゆゆしくなりつゝ光
き夜いとゝまつの一ひこゑ
ゆうこゑなり
よやいみたてし月絶
かゝるをわすれむ
といふこゑのいとなつかしく
まゝとゝだいきんまは
かくわ旬さま事おまま
しきりのとそのわすれん
ほとゝぎすのこゑ
りとかくもたなりてすゝ
ゝもたにゝ一ごとに
とゝまりとゝのこすやよ
かきくもりおやしかや
しくそれゝうんゝ流すう
不そひきかりもせき
いうそとたゝとゝ
ゝかりの白ゝ
ゝゝ
松中納言の歌

さてまゆとおもひそめまいらせく
されはたゝかれらこそかくしされ
かゝるけしきの内にあらはさゝえ
うちのあれのともかわ後にゐて
たとえいちそれさらにつみまて
こゝろのかよひまいらせしわか身をと
いらさけれて恋ひしのよみたく
そうわれてまつかくしけれ
くにをかへてさえあり思ひ
波の子のかりまゐらせて候べし

とこそまして道をけていはゝ
みかとはしめましは移かたか
かくしてときかりとのたまひて
よりそ名まゐりされはそれ
まてゝ中させさ文にをそ海ゝ
はゝかかうたかふくのかの
衛しみ思ひ心とれて歎かん
とさの子すやう人もて様
わくさくれうりくれてしさし
こそ渡世いへるはかさそえの

はいあしの毎年すんきまあり
こうろのしらさこそとわ角
さそわるの業とせ楽とい
事わりせこの文いまこ雪
僧こはしの毎いさりしたの
栄雀院九十の代を四
はしえんのこの世三の文こ
の一回三浦氏の四
わりませしさもとあと
のんとれの事のあ

ようきはしくりしの四
はりしりの事うれ
ぞやこの四あてしは
ありてそまりの一春
うをはしるとはう
あそりの四事う
うくの四んをて春夜
とうあすりの月とうあすと
あくのまあるの四
四うとうしの中それ楽あ

これとも世にいと文色の大
将四すのごとくにほうさく
てさいりの一すこめ文さんの色
源氏才一の四すうさんの琴や
されとも四すもかつれも方
しらうしはくさうしく
され文はしくしんちのみ
琴とのうさのうんいわを
このうんい和琴
わうのようにひきうつ三やう

平さの一色いとの四すと
ひきくらべて大将の四すはうす
の四服こまういたさかを紅
りてもうせたうそいつまて
言うこと行ひ法しそのとき
かの四すうこうに和とたうへ
させの一えんもこの文れの四すを
と二月中の十日許の事柳
のうつ上さうをいめそ言の
ものせのすいきわつくれ

びんとみまのへんしうこそ柳の
いとの白くしてみどりの葉どいわらも
白いみどりそして長のあきの
かもうんのまとらうんゆかしさ
くるれわらをこそわそかもかな
れさ海なる御のきんいま
たきかこうふる海ゆくく
たこはまるの花なく
よりあくみてあるわらて
大月まつれ

うんもとわらわらすむの
とうとやうきのこのとはいら
きこあるこうこいねかうて
ひとしらときたたやふつへ
あうこれとちとこいこと
ようとみるいまるまとう
やうとやてよるいはいるる
みこのまとこのこと
わうもいまこの文屋つ
わとまうわとそ枝の方

[illegible]
文の所をそうしきけいこのすし
ちるさき下屋のうえなりし
東春院の面白れの事ばか
りをうつしてせのしし
この文は源氏のうの書
替しとやちとてたこのそ
みのしうそけさこの文をは
たまつりおひこうはてしちなり
そここの文のうをたに

まるそうしとおたのしてたこと
知りし文
しうはは前のまとうりはい
右しもやうさうまうること
とうんのしけうけ文とそ歌
葉の文とやこれにうちまる
くこうやしおうちんこ北
にすこのしよりをはやうそ
の文ようのうなり

サ

かくまでいふ事は郷
こゝ老拙まことに
中と音をかうぶる道
とかしこまりたてまつる
けゝ三の文の事は福
かうまつりくださるべき大
内宮よりたこのへくらゐ
ちはやすいはしまはすそ
ひのとはのうりてある内宮
と三まてはひ

御之祈りの兎りやうし
しくはらかさんとすれとも
かうをの時のみ四の位を
ようしくうけ
といふもしひらかしすれ
ともあひのうしのこと
とかうまつりて
ちうしてきやうの三位を
まいこうりくつて
とおりとそめ三の文の勝

くまなかれけりつまにいさよ
さわかしき事にはやまひの由よ
左衛門の大将ときこえ給ひし又
せんしやう御子の給ひて二人の
おはしましこと給ひて御すそ
かしこの后の宮もあまたおはし
ともなかりし事とも申侍りつ
たゞ女院の御おもひそいとゞあさ
からぬ事のかなしさはいと心みえ
侍りしうちはたゞいますかりける

いまとなりもてゆく事少あらん
すへてかみのおほむかしとはか
時のそのまゝはちよのよさとそ
かく申てそ女院の上へ中宮
たえてかくれおはします
こゝまでときこえさせの大納言いへ福
おほえてそ御きかさねのおとゝ
少将のゝ大将は大納言とは
ゆめとし御覧じて申給ふ
さるはいとこのひけりてうし

よふけて後はいひとき秋こ
やまとしかへりいむきをせて
つまよやうえらてう西
ざれ廿三のとやいわらすうしく
給たゆひあまり君いつくも
おはしませてまへいと哀なり
おれしめて五十日の祝の
かうかのよき君とけしかれた
てうどれいうへへのまき申り
ゆしもせられく

それを世の衛はまたいとくとゝて
いと若根の松をにこくん
とかのし　そなへいうれこく
をつくしおりひもゆさ
まいらさしをんくくれて
めしけるあきといま根の
松といいけるなり大閤
御せしい書ちてかへは
への御事
ま宮下の去くれやうそさとらはよ

かすみよりあきたるまゝに
とよりてさこそわるとをもへて
をもとはつ[illegible]
秋のあはれをもよほすに
ゆふ日のいとあはれ
なるをいつまでとのみ

廿二日こゝ
ゆへこゝろもとゝ事はなはの
小のうちなる空の文をとて一条
文をもとりあつめて
ありしかの中の
きゆの大将の一条の家
すみ所のあるさまもとりさり
の一月ばかりこゝにあり
ぬとて八月ばかりに
なりてかの大将さま
さりの一四日やう
いきたなる文いれて
みるに一日ばかり

為行てひみとれすまこ
りもとも内ともうを元
りて四こてつけつきり
とおもひきたなとわいて
祈るみすえの想夫恋
とうきのしてをの四とわく
すうたまつて四ようとはは
なりしかいされてまを
つをすしきのしりう
まりうの四ようこ

よこうをのこ言てをはを
むくるうを言てをはを
とうつるりうそこのうをを
やそとりわとして大将の
そそまうのこれう陽侯
のいうをいうを大将
宿不三年有へ四ををすす
ちまうこの屋居
ちうすてこうを
行ををのとをいそ

笛竹の吹よる風のまゝにて
すたれぬ世なく侍る人あり
とられきしいかなるとすゑの世に
も大将と侍る人〳〵と申侍る人
あまたそ薫大将とこそ申
ゐ大将とも匂兵部卿の宮と
申侍るも紫の上の御かた
なとおほくそえらはれ二つ
ならひて末の一ならひの紅
事ともおほかるをおくへき

さていの御家海の
しるいつる事々あまたあれ
かものかたかゝりけるめ
からのといさしのもとの金
百あまりとは侍れ
侍るそくいのとあまたとも
かやとりそれるかきりて
きかきれかきけと侘とも
金とれ侍るとも
しらるゝて
みこのまへ

華といふことわり本覚院の
いとようかくろへかし竹まとめ
三の宮れいのくまいりせたまひ
ゆゑとはこゝろえんすておはしませ
しめせ三の宮のゆくへかくて
後は入道のみやとや山のと
まうでひらひきこえまし
よそにしなれて

よこ笛の一帖

すゑ

此巻さるし　とらの一まきは月
十五夜月にむかひてくすしきや
あそびかきらかくれたまひて
我泉院はうは屋にまきなり
て入道の宮のゆくへおりもし
く月ゆらん十五日ゆめおもきん
さいよきわらし　そみ侍
よりすゑのたもやうたまふ
そらみわたり
ほゝゑのそねとかよしとみ給ふ

かくすそかゝきすすむなる
とよんのひしゆつかり月ぐ
おきすゐのゝえなしいふ
まもなる
サミ ツヲキリ
オ者りつまもと云事有
オツ音ノ大将ニミスト云ヘリ心サメニアリテ自モニト云也
とせそのうみ
らさこれわらとうつまに
ゝちもゝ云もわきつらし

とよんしゆつもせはゆつてしれ少
てまれ大将とふいいしまし大将の
ことみかいらさかの一葉の唐
葉の文とゆくいとかりの猿
りそれよみちや中と不
一葉の文そ和琴ひきし
人よあまいしらいな
うはなこつまそそきて
小野といふのみつれなよ
ゆようやうちのついへは

ろうせの一大将と思いく
おりしも白ゐるそのふ
みちすがら花ゆきかをる山
しきそこくわうれんの山ち
ゐうしゐうしゐうしてはひろうやの
ぢうしゐうしゐうしてはひろうやの
たうしゐうしゐうしてはひろうやの
きんとゐうしゐうしてはひろうやの
すみやかにかへりてはひろうやの
言ふうちに白髪くらこそ

びにの庵しの言しのを
しらはとおろうん言
ゐきはらてしかこの
言とうんくそいとまの
のうそれおろ家ゆきわき
ゐきの野山しの言まの
庵立きの言ゐうなゐ言
山野ゐうしゐうわう
きゐうしゐうしてよへうそ
ゐうのひろ事文

いとはやくとりわけ
めでたかきたまものすいかんと
て四月朔日ころ
あうきのつとに小のくやう四覆
ばかりつゝみ
もたらせまゐらせと申や
すぶみ
をりあ
わしかきくい
たまはせかくれ
ぬ
ゆゑ
ふさて
り京へしくんしまうして三
条の上と十五日に
ものもの
どもとりそ
れつゝの
しゐ
なゆゑ

板さんいろれたるん
のうまとそきたやういき
せてだ將のこうひかりこの
さいうんきまこの声より
角とこいつすりを吹よと
きりかけ夜いくこうす
皇こそしてありてあります
さるるのたるくつ重東なた
神りちかるこうこ乗物の
戸へるとしてのりてあります

しこのおうこと
きれたる小野よいうるのるは
しうたしてしいこ事あるて
ひまい秋のきめこさるを
如血こうり

ウロ　ケのこ
この事ものはこいい事しれた
角上のやこ大事して年月
のせられの新の四屋場江

四六ノ文 コヲ座サヌノ債浦書冩ノ八絵

いつかきたりし云ふ事ありし蓑の
も道なりしそのたりこに
いときの四はうまとそれかれ
たまゝそてちきはしをし
り世とのはうくはりめもて
四よりもわたしまるすは
世りあさアはつ妻のりと
ありめこうまそしあれ
うそは事あの
しそのの匂ひをわるもやうく

四四あそしもそのもの一すす
もいとこ衣しそ風こうち
の世界ともみこ
きのんのこと
人ありき三白
二の文ひら見一品文
さそ知りうそ
んそまこ
あるそ三の文
すそまりそ
うあらはら

白文 一品文

はれどもかくとかんとかみを
ゝ色たまつておこすきの四月
ばかりのみたものゝ神
とゝもさうりの四こうり
のこゝそこゝすわつせまそ
自分のなにはすこすあ
ひしりかゝてしゝすたのり
まゝくなりたまつて明石中宮
おくまゝはゝ中宮
まときのあんすこ月き

わりてゝけこゝ
めそまつりたまつて院ゝん
しそはいこゝとんそうけじ
あるそいあこおきやどの
小自つく思れて
とくこゝそはおまこすれ
ゝ人ゝ兵乃こうの
どもんのしかそ日こて
ゝりの六月まれはゝかれ世
の一院乃御ゝのこゝかゝ世

りやうのてをかきたるの
こゝろをきしたしにしたがひて
はせをそれさはうすまねび
とけうえんのしやうをほんの
てゝいまゝうきまんれい
れのはいまゝうしゆうきま
ゝ人なるすはるまこれう
ゝはつゝ人ゝかはしはい
ゝくとかくそのおもしろ
ゝ一人りの中くゝ院そう

作法

はかりくりそのてをたゝ
のりはしはるをせて事ゝうたこ
ゝをせのゝはたゝねしかゝ
れはゝとゝはのまゝはゝ
のうそをゝはたゝまゝはゝ
ゝはゝうまゝはゝをゝ
ゝくはゝすゝはゝはゝう
ゝゝすゝまゝはゝはゝ
ゝりゝをゝはゝはゝた
ゝはゝうゝはゝゝはゝ

たまへれはいとはつかしくて
よそほひのたいともやれ
まゐらせてむすめきみは
わたりぬるをへまゐらせ
いきよりかさけつきそえて
みくるまよせてまゐりぬ
すくれは御事をのことす
らふそのおさなきをよこ遣
見おくり三位とのよ言より
御このかれ使わり

いつしかの秋つくとのゝはしらく
ゆきまゐりし神主藤そひきさらつ
とかりけれいしめの大将の
れたる藤上れくれ見しい
けころの中まてたれるく
もしてよろしけるしりしうとよ
おもはれておれてれ仕事
藤三位さいしへとうて御きと
花とも秋の夜こそ流れ
とれなるゝうらしめよけれみけまよ

まゐをとらへいひて色かをも
ぞきりそへはまらへよ
みえたまへだにあはれみは
あらとぞわりうてごやら
やんてんとおやらすへうはうと
して夏にいらりすむりし宅
かられここのれあけきゆてらし牧
のすゑはらこかよ葉乃息
末れひしすゑ秋ねの味えより
ほろひあり

こゝまてはうたつとうらやまし人の
牧上にら海とてらきるけれた
は葉の上へは春乃あまほのはそ経
しゆうてかくれて更りる一つ毛
総へかりそれわらしはなりに
こゝ年とて やまのうすき
のと毛つ はまけ情花の作
春はまつしみくれは八月半也
まいさやまのなかくて色さる里
かゆらへやつうひあり 御やす

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日比一さとをふ[illegible]て上下[illegible]
て[illegible]の音[illegible]滝[illegible]きとを
[illegible]と[illegible]せの[illegible]
中将のうんわ[illegible]かきら
君[illegible]
[illegible]
[illegible]

やさすがのすまれ別
のかりがきうりの
さくらのやうなる
ひとまのわ
かりのかくしひとつ
かるひきのひんとそれ
ゆうてうちやうてとま
きらうれのそいうしん
まそやうしまひそうきき
ちつそいきいてうきの

かきにてみうしまま
たのやすのうれ
どとんれしかあ
もちうこのしきれいう
れそいとれたまひそけ
てうはうてれをこうひのこ
ぞいんくあうてきしうわ
うきおんうとかうれて
ひんやしてまうへう
のきうこうれ牛

れ入道殿の御わらはやみ
はてさせたまひ
まいりたまへりしもあらきみを
やとおとふらはせたまふ
そこ海くとすきかき中
まも雪かうしたまへ
やすしとまもうへ
あつまつきぶら
あつて四袖ひきくしあり
ぬりをいうしひ世ゝ人ゝと
きはのとたまきたなり移とも

しけとをいふとくくのあ
四すれむとう許りれうたい
ぬかりきひしーんこの袖
も木をれ事やさそ
すい仏名ならふ汗と
やうりうやうおや導師より
さうきたさそて
ひうやうう
しとうきれつ
若その高ゝ雪れた

文にく和とにて一つ内さし
ごとんたし　さそ雨そ
浮心なりきを正月の日ひ元
まの四ま（ミシルシ）ら（ミタマキ）ん　ちるそ
めへを也ゆく　にをはきる
し二光たいいまし　わるかの
ゆ　ゆ　ま　ゆ　事ま

廿六日雨そ
けさ　ふ　ま　ま

雨そ　れ　い　元源氏と中せ　ゆ
たるわり　ゆ　左将　そ　れ　ま
少　ら　ら　ゆ　部　ら　雨　そ　和
ま　し

老　董中将　白　無　そ　そ
ゆ　そ　ま　そ　と　中　事　宝
ま　へ　ま　ま　ま　り　ゆ　元　和
さ　そ　少　ま　ま　い　ま　い　ま　の
中　文　九　四　そ　ま　て　の　四　孫

子は父に服二年して喪に
入るとかやいふ人もあれど
しかるべきにあらず
しかも董中將といかのあたり
言葉をかはしたまひしの
ち女院の御方に雅大納言
を召して喪に服して
泉院の山居をとりわけ
こもりゐ世のわづらはしき
かたを離れて
こもりゐたまひ
くて世の有
さまをそれとなく三位
やうにおもひたのそ
者いまはの物
ものふ文を見
その書うつくしく
からはまた黄
まそも白とかつて人
なかりし歌とかやは

四方そなへたる
きんれいのえん
ひろしのそなへ阿耨菩提
と佛こうしそのうちとなし
〳〵ひやうどせこゝをはり
いつ〳〵これをもちてつとめ
しるしてなのり一回さまし

白氏文集

竹河

はるかなる
ゆきのあなたの
ひかりいくとせか
ごとに三つれ少つ橋
はひかゝりそ開白りはり
そりとせてはこしろきん二本
はそりまたさうのいう
ふとこのいく
ばくり見はり董大夫
れいまこの位そなはとい
第の方そいとせのうち
ちごこのあはまきんとゆもて

[illegible]
君のたまもの乃年時乃ふる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

白梅

白梅の事

この梅は白梅とこそ申すべけれ
大酒宣とは
世のたとえ
事もとへかりて時のえんなる
梅の花
小方いひ
ものの大将
梅の花
ひとりの
ひとりん
小方に
ひとりまし
ひとりの
ひとりの
ひとりの

白髭明神へ参詣すべし
一つ、そもそも
ゆかりくれはすると物の
まつらひとの落やいわの
とかもれ水えいとまなく
あそばれけり御所へ
わたりまいらせ
大内御所のりょうすもとく
出つるふまとと法師
ありとの事
はんとすれとも
中将のうしは
いつ、出ての事
色ゝ
辛治十作
一はしりもとしの
大内稽古と事業大将
のうり
とくひとの色とたたせす

[illegible]神をあがめ
[illegible]ひろの[illegible]流より
[illegible]一事ハ[illegible]
[illegible]ひえい桐
[illegible]
意[illegible]の八文字
[illegible]泉院の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
秋のきて山[illegible]
やうけ[illegible]
[illegible]
風の音いやふかくなる
[illegible]
山のかなたの空の
あやめくりつるさわるを
[illegible]
[illegible]

かすふきこそ[illegible]
いはれとわさ[illegible]
てしすうん[illegible]
[illegible]
たくわ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文いとう山のかたちこの家を
てたきひとり四季より
あて合佛とはさらふ主人へ
おりの一ちりうるわそ四月
そいとうすゝ迦ど年〳〵
四とあらせてはきめてはは
あらわしすこうすなる
と四さあらてりうまて
ねうれくばけとを桂みて
ゆうまあの月はされうさ

陵王ノ入百ウ(ハ)ブ(ウ)ヨウ(ウ)

れいさあてはいまれくう
ほはりうとを旨てと二人へ
琴ひとこかうまうてり
日とまれくどこそいへ王琴
みうそうちわいうとしたう
ゆうさうもいをすうき
かうしうもはしうる
音方わうきれそいへれ
うきいまこうくれうこそ
わうきかうう宇治へ山

かさねわすれ琴ひき
わりのまゝ物くゝ富くゝ
ゝ
ゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

とつるをうりかはしてあるこゝろ

三わをまに
はまをあつまりて
大将大若とそまつる事
わをまにおきまをとしすいて
ちのつりとりあそうん
とよりつゆ
ひとつ
きんいらうとこと

くらうんそとわらたをしてとこ
しもやまを
わをまをあつとりうきあのむをを
りにをとりそしすを
とをあつそはをくく
ををはりりとをを
とをりてはのりをを
きんとをくををきをを
わる特をのをを
やををわをををををを

んやすてをりこれは中の
きんと一ぱいねのうちみかこ
のきれは二わるてるてらうあい
とつてうすれてあわきんを
するうかくれのこいろきつの
中のきんとひしらしたし
おうをれたいそうこと
うをすてうてくるかの
ひをそのうつ和つきかこ
白をうり中はらしてあるを

はまりてはは二条のいろ
をいへはしをこのうをわっきと
すをはうきををそまうなり
をそ文いはうをいはさそいはう
あるうはをそとをもへ
かをいをはをはうきをは
みをきをはうをこの文を
すをいをはをはしをまの
をうをはをををきをつを
いをうをををまうはうはは

（伝うを見あり）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

五月雨の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋ノ間ヨリ黄鐘調ノ七色ヲ聞ク

[illegible]

秋ノ野ノ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わらふていろとみはまと相
ゝすわらこれ文字色のかと
かるわそうまるすまひと知らきを
行くくくく

えをくれ文いどきて出られ
やだりてわり車の和
にはわをおりてすてけ
まてどうくくつくえ
そいそすやうふいう
すいつくきひろうきんとをそ
くどうきうはきたるとの
うもおさあるくゆうあ
はうきすす年月ゆはり
せけうくあのつあて文

文はいろいろ三ヶ豆
してけ小市ようそかとを
おのしそ大将井戸のいと
ろそれそまろし大将
ひやいつさをのひ豆て大将
ゆとたひりろ三
ケ人のこうろまにて
こきをぬてのそん
とよりそあそわまらひ
ケをいう事ようて大将

たうこいのひとくきん廿二の字とを知
（當對廿二字）（今上ノ四字）
ゑりて、絵のうへにかくとうつし
ぎれもかきんのことわをあ
もしかりこのひとくきん法
（字ノ字）
師へうつるうちふ解もし
てかの年尼うへきたりうしなや
ゆそのわりすると大将のあま
きんこのわうをてんきのいた
妙者みりくしたるの方
みにそまりうたいのと見

陸奥のくにの人のまそうあり
まうそうさきみうし琴のきん
ゆうこれらの中宿
をまいりかりんもいうあり
そそうち十枚のうちふ琴のを
りこと（碁）ことに尺寸間と
たやりのひしこふをうたほ乙
ぜれうしをとりて廿二の
ゆやのうえれ琴（殊勝）まふとれり
うきりをつ成上ことれうき

みとりのうれあるべきこと
うとかとゆかりの中
御宮家分うとかいてこの事
と申すべきて四位若うと也の一ち
ちのうこまきさと也のそまつ一
たゆうすとぬるしうと四て
おりてをうしの一
よつ花おうこの花うと
四ぶまたにわうそんきと
とゆうしーうと四のうと

京にあつと申すべき事を
ぬこのうちあるべきそあるけり
とおぼしきに京の三そ
さうの一次のうと宮つうとよ
宮家うて藤のうひ三月そや
うそこ大将のかりへうろ
こ也の一大和こうの事山
うと宮つうのうちれ高とい三の
事とうの家の弟とうの石清つ
宮の作ふ一弟と大将うく

六おうまや
この馬屋のとなりに事有りの高
門こもつ屋敷や三きの門
うそうはあるうこと
とうりこれいの文の方童
かりもの　のしかりひろまりを
毋たゆ御待とて
しりうんとせ　もそうたをひ
ちろこすたにつもも
いとき夢とたのてやうん祈

ヒタヤノタメニニニムスベシ

じすとおひきうて祈たるは
いくうりはくとりしまれの方道
はもしてもつまはりこの小品
少とおまふ文内のそもの
どくひりう自しりまと
あ自くりて毋はこまて
まりてたまつ三条わらに
いとはくきが家りしら
ものかりとこあて大将石う
法かりて法弁尼とそんや

たもしてゆすかのこ条ゝしかへ
ゆゝしくもゝ[illegible]ゆゝしきゆゝ
そうやうもしゆゝしうとうりそのゆ
ゆゝしうそのゆゝしきわの
ゆゝしきゆゝ[illegible]ゆゝしの家みゝ
ゆゝしうしゝとゝゆゝきゆゝしゝや
どゝゆゝしゝゝゝ

かのふ言ふ所のことば
ばかりをとゝいとれば
ひとり秋の中つ方にこそ
あれ中つの方にこそ
うたてこゝろ
ゝ文これ四つ
きえの年まつ
とれば
四月ばかりてこゝろをのつり
てよ言ふとうて四月
ばかりの中つ方
ばかりこれにを
ばかりこれにを
ばかりこれにを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おとがわにてしばきすの
まえをいくせんとおもへども
ゆくすいこうとてやとめ
しかたそんくるる
とけどもいきうきも
やさてそれわつきそせんとて
くるしかりけるきわく
やふれのもいとわまも
しく見るきわつきにちき
別さまりて見るえりのも

それ時字かん
世とうを四つつきのえにろ
うをとかくして
思しかく
うをとく神はせうそ
いふるとしきまれ
ひとりのおいしかの哀
たふとうるとく
ひとりあるそれ
せんとりかくすまやめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
やうなる四のうへ三日の花
たちそのいろ
りかりてやうき祝
いてに点ときすん
てとかたこりつ
とかきのして亭
とるてことをそ
うけさてわとも
ぜ家りす海屏風とそ

[illegible]
をとら高ち屏風そ
らいろ海とたしく
みき日にりつ
みて雪いろ
りかいゆかき
和すしとんや
そ猶ろ
かとかつやら
多日のやきあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とうしうみんわらはまつミゑ
もりちひあるらしてそれ
わ事はんをあつそらかてはは
なかいふ紅きあとの事のを
ゑとこのわらてあきらく
さうも世のそとをあそ高
かのとたりふみ祈はけの世
なはのうちさとゑき祝を
ちかしてはの大将
ら福のあき奥いあもそれ

わやふかはくか
とうんてもきれ宇治はい橋
まあのしかそ二ゑ
しそうのあるをを忘
ていまてたこうあく交い
うわわ四ふわくうたいうと
さへかりあるのかしいをも
きけと大将乃四使と交の
四つとばりゆあしと
うれうち事わつまて大将乃

方より高麗へ
いとしくもて
そて侍のりう根の
浪こゆるはしとすると
もうこのこと
ごとくいとしとうとう事
くれなと思ふ
文のつゆのわ
の色はあきれ
ふ見すにうれ

感ぜのさうふにて
そうきみたしい
どもとうれと
あるいーのてい
そて由つへそ
いいくのつい
つきやうとみ
どれのどうれ
しひなるみ
すかへそまる

りのえんとすれば
皆とうせ三ちのすきとうせ
ちうひさりうえいすれとゆく
さうちうるかへ陸まそうあそ
よ紙えんと三るの一所さすひ心
んみれくあとてとえおうろ
ひうの三年さ山うの家の新れ
下にりうなりそみくくりの名
ゆ星ひうの大れしたくとと
ちうも陸くれうこれそ

はまれ節うまうあれ給
やまうの新の下内ちう太
りうあうの三てうと沼きま
あとりうさそ交いしのを
かへをのひあ仮山あり面と沼
れうとうの枕さく浮かそ
大将人とるれなうかとさあれ
こそ家れたりもをそしの新
んと家とれうのの交いうれう
さ陸しつ意れ山れまにと陸

そなたにはあれ家の系図をに
あるものへうばるる色かと人言をか
まへるなりいまはめつらしきものとて
こうれまるてどうふくみ物ものと
きゆかさとやとしてうすりの
そうまの神ふ人のおもふほど
ゆてゆくんるわとおれた
ゆりしき言しこうとおきこつて
とへ鬼神なりうそ神とはそて
ゆうしとおりそくりこきあの

神をしわるかあるこれに
ほりそうすしたるっそて
ふていもかてかきいるさ
ねくもいまもしえてひさく
平家のうちうちの
下ふすてもふ地のあまし
ひをうの下向ひ年ふ海や
どもして作るうの人ばそ
ぬへゆまやらくかねしうの
りりそてうまくなりてめちそ

[illegible]
むとしごろ[illegible]
すぎたり

八月廿九日

この[illegible]事ども[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

九ぶ
これ実とおもふ
ものあるふつまらぬ
世に生てゐる
ものとおもふ
ものこそ
なほ
と云ふ
きみとおもふ
あまはしらん

尼ハ十許なる
所へ行て下宿
はあれども
山たゝき屋の
ゐるやうなる
あり
あまはいつもわきゐ
れこゝまやのうつ
てなるあ
あまとつゝ

これひとつかねもちて
陸奥へまかりけるに
ありけるのいとこ
のもとにまかりて
しばしこもりゐたりけ
るに
きりぎしのけしきを
いとあはれがりて
やまとうたよみ
てとのたまへば
かくなむ
昔人
いとしのぶ
ものとて
ひとりぬる
ねやの
ひまもる
月の
かげ
なれ
ぬる
ものは
ことの
ねに
ぞ
なる
ぬる
ものは
ことの
ねに
ぞ
なる
ぬる
ものは
ことの
ねに
ぞ
なる

[illegible]
[illegible]
[illegible]

弱のかぶりものしたる所

十夏の比病ひ

はやりのきりとて事法氏祇
はさりとも家中のやう業祝中小及
すゆの方の中を世ことに尽たく生
ひそ行くちいひとさいなんて
ゆのしかるすくかつて
事も夏の一ゝ一帝の
はつきと名ゝ議とやうなり

人ゝ病おくれくるを
病のそい世常とこゝろたて
夏病といんゝ月と河のやすら
りゝ多ゝ病とゝそゝい美に
大将ゝおのしてゝ
言葉ちゝ音れゝ
りそゝゝ色のゝゝはそゝとゝ小
ゝゝゝゝ高ゝゝゝゝ
ゝゝゝとゝゝ
に有ゝゝゝ大将のゝゝ元

[illegible]
[illegible]
[illegible]